

# 井上円了とカント、再考

柴田隆行 *shibata takeyuki*

詣韓図先生墓前賦呈

不出郷関八十春、江湖遠処養天真、先生学徳共無比、我称泰西第一人（一）

はじめに

一八世紀ドイツの哲学者カントを井上円了が「四聖」のひとりとしてしていることについて、福鎌忠恕氏は「井上円了と西洋思想——円了における西洋哲学」（『井上円了と西洋思想』東洋大学、一九八八年、所収）と題する論文でつぎのように述べている。

現代的常識をもってすれば、到底理解しえない東西古今の宗教的、思想的、哲学的諸派の一見奇怪極まるシンクレティズム（折衷主義）の成立が従来究明されなかつたことは不可解である。それ以上に不可解なのは、カントの代表作『純粹理性批判』がカント自身をも含む「四聖人」に「奉獻」されたことである。（同右八頁）

福鎌氏は、古今東西の宗教的、思想的、哲学的諸派が折衷されたことに対する究明が従来なされてこなかったことを「不可解」だとするだけでなく、そもそもこうした折衷主義そのものが「到底理解しえない」し、しかも「それ以上に不可解」なこととして、井上円了がカントの『純粹理性批判』を聖典として奉獻していることだと

述べる。

井上円了は、東京大学文学部哲学科を明治一八（一八八五）年七月に卒業したが、その年の一〇月には早や第一回哲学祭を開催、釈迦・孔子・ソクラテス・カントを四聖として選び奉っている。そして、明治三七（一九〇四）年に哲学館が大学として文部省に認可された記念に現在の中野区に四聖堂を建設、以後、六賢台、三学亭等々を増設して、哲学堂とした。円了は大学卒業後から晩年に至るまで一貫して右の四名を哲学の聖人として尊重し、毎年一月に哲学祭を開催しており、彼の「不可解」な行動は生涯一貫して変わらなかつた。したがって、円了がなぜカントを哲学の四聖のひとつとして奉獻したかは、円了の哲学の根本に関わると言えないだろうか。

井上円了がカントを四聖のひとつに数え、その著『純粹理性批判』を聖典としたことは、井上円了の生涯変わらぬ哲学思想を精確に捉えるならば、なんら不可解なことではないことを明らかにすること、これがこの小論の目的である。

哲学館を引き継いだ東洋大学は、現在も毎年一月に哲学堂祭（哲学祭ではなく）を開催しているが、その記念講演として釈迦・孔子・ソクラテス・カントの哲学思想について順番に各年ひとりづつ文学部教授がその業績を紹介している。たとえば二〇〇八年は小路口聡氏が「孔子と現代——『共生』の原理としての『仁』の思想」、二〇〇九年は田島孝氏が「ソクラテス——哲学の原像」、二〇一〇年は長島隆氏が「カント研究の現在——新しい流れと現代にとつてのカント」という題でそれぞれ講演を行っている。これらの例に見られるように、四聖の哲学思想が現在どのような意味を持ちうるかについての話題が中心に据えられ、井上円了にとつて釈迦や孔子、ソクラテス、カントがどのような意味を持っていたかについて最近はあまり論究されていない。不肖、改めて筆

者が「円了にとつてのカント」を考察するゆえんである。

## 一 「井上円了とカント」

ところで、「井上円了とカント」という課題は、冒頭で言及した論集『井上円了と西洋思想』に収録された二本の論文ですでに考究されている。一つは前述の福鎌忠恕氏の論文であり、もう一つは馬場喜敬氏のその名もずばり「井上円了とカント」である。いずれも極めてユニークな論文であり、最初にこの内容を紹介しておきたい。まずは福鎌氏の論文から。

福鎌氏は前述のような感想を述べたあとに「カントはいかにして『聖人』とされ、『純粹理性批判』はいかにして『聖典』ないし『経典』と化したのか」（同右八頁）と問うて、円了のカント理解を探っている。具体的には円了の著作『哲学要領』前編・後編における哲学者の出現頻度を調べてカントが最も多く言及されていることを確認し、カントだけでなく、リードを代表とするイギリスならびにスコットランド学派も重視されていることに注目して、円了のカント理解が、カントの著作そのものを研究した結果ではなく、一定のバイアスがかかったものであると指摘する。

カントに関してハミルトンを引用していることは、円了のカントがカントその人でなく、イギリス新カント学派のカントであることを裏付けている。（同右一八頁）

それは、円了が「相当の英語力を持つていたことは彼の講義メモ、ノート等により明らかであるが、カントを独乙文で読めたはずはない」（同右一二頁）という消極的理由からだけでなく、福鎌氏自身がそれに続けて述べているように、「円了の研究法としては必ずしも原典ないし忠実な英訳書を味読することが要請されてはいない」

(同右) からである。なぜなら、福謙氏が指摘する円了のカント理解の二つ目であるが、つぎの特徴があるからである。

円了の西洋近世哲学摂取の目的は初めから極めて実践的であり、端的に表現すれば、印度、中国、日本、すなわち仏教、儒教、神道ないし国学に加えて当時の大先進国である西欧諸国の近世思想を摂取し、累卵の危うきにある日本の伝統と道徳を再構築し、合わせて真の独立国家にまで立直したい、というにあった。

(同右二頁)

井上円了が明治一九(一八八六)年に著した『哲学要領』その他の著作のほとんどがいわば啓蒙的な書であるのは、円了がたんなる西洋哲学の紹介者ではないことを示しており、後世の評価で(2)、当時の西洋哲学研究は「カントのみならずすべてが紹介または啓蒙的色彩の濃いものであった」し、哲学館講義録に出てくるカントも「大方は簡単な紹介である」とされても、それは意図が異なるがゆえに詮ないことであった。

それにしても、「円了による限り、カント哲学の理解のためには、ドイツ、イングランド、スコットランドの代表的哲学者たちを、少なくともほぼ同等に、かつ相関的に対比、検討すべきである、との恐らく暗黙の主張が行われているのである」(福謙一七頁)という指摘は、その後の一時期日本で大流行したドイツ哲学一辺倒(3)を思えば、極めて注目すべきことである。

円了におけるカントは、カントその人ではなく、十九世紀末葉におけるイギリス新カント学派を介して捉えられたカントである。このカント学派の特徴は一、カントの実践哲学の重視、二、自我意識の探究、三、経験主義ないし実証主義の重視と超越論や先験哲学の拒否であり、その結果としてドイツ新カント学派西南ドイツ派のごとく、自然科学対文化(精神)科学の二元論に陥る傾向も内在し、それを克服するためであつ

て、一般に著しく実践哲学的である。(同右二一～二二頁)

福鎌氏の指摘するように、円了がカント哲学を同時代のイングランド、スコットランドの哲学と同等に捉えるべきだと客観的に考えていたのか、それとも、当時すなわち明治十年代の日本における西洋哲学移入における一定の条件下での影響によるものかという点にはもう少し考慮すべき余地があると思われる。と言うのも、当時は、いまだは想像ができないほど大量に英国系の哲学が移入・紹介されていたからである。井上円了が『哲学要領』を著したのは一八八六年であるが、円了が東京大学文学部哲学科に入学したのが一八八二年、卒業したのが一八八五年であるから、大学で彼がどのような哲学をどのように学んだかについても検討しなければならない。このことを少し具体的に見る前に、福鎌氏の論文と同じ論集(4)に掲載されている馬場喜敬氏の論文を読んでおきたい。

馬場氏も、円了が読了した哲学書のうちカントに関するものとして、E. Caird, *The Critical Philosophy of Kant*, 1889 と A. Schwegler, *Handbuch der Philosophie (in English)* を挙げ、「多分にケヤード的イギリス新カント派的な読み方がなされたであろうことは想像される。」と述べ(同右一〇五頁)、さらにインド学者のマックス・ミュラーがカントの『純粹理性批判』を英訳していることから、「ミュラーの高弟となつた哲学館出身の笠原研寿を通じて、この英訳書を座右においていた円了は、持続的にカントに接したのであろう、その脚注などによってミューラー的なカント解釈にもふれたであろう。」(同右)と推測する。ここから馬場氏は、「井上円了とカント」というテーマを「比較思想・比較文化的方法」で検討する必要を認め(同右一一三頁)、『カント受容史の一こま』の中に円了を埋没させるのではなく、別の系譜の中で円了を見直すことが望まれる。(同右一一六頁)と指摘している。「別の系譜」が具体的に何を指すかは不明だが、馬場氏はこの論文に二つの付録を与えている。一つは

『星界想遊記』繙読」であり、一八八九年に円了が書いた小著の紹介を通して和辻哲郎などの四聖論も含めて、地上の哲学界から天界に及ぶカンパネラの『太陽の都』からラブジョイの「存在の大きいなる連鎖」までの宇宙論を検討すべきだと提案している。もう一つは『南半球五萬哩』追遊行」であり、明治四五年の円了の著作をカントの『自然地理学』と比較して読むという試みである。いずれの論考も深淵すぎて筆者には理解を絶するものがある。

福謙氏は、円了のカント解釈がイギリス哲学の影響の下にあるとし、馬場氏は、円了のカント解釈が哲学書や仏教書に留まらず星界や自然地理にまで及ぶとして、ともに比較思想・比較文化的文脈でこれを捉えなければならぬと主張する。両者の指摘は非常に示唆に富み刺激的であるが、いずれの場合も、両者の論考の出発点であった、なぜカントが円了によって四聖の一人とされたか、という問いの答えにはなっていないと筆者には思われる。

## 二 井上円了のカント理解

井上円了は、東京大学でフェノロサから一年次（一八八二年）に論理学、二年次に哲学史、三年次に「西洋哲学」として近世哲学を学んだ。山口静一『フェノロサ・上——日本文化の宣揚に捧げた一生』（三省堂、一九八二年）の巻末にフェノロサが課した試験問題が掲載されているが、円了が入学する二年前の一八八〇年度第二学年「哲学史」の問題のうちカントに関してつぎのような問題が出されている。

第五 カント派ノ哲学ハ其古学派ノ統ヲ承ケシ者ナリト認ムルハ如何ナル理由ヲ以テナリヤ／ 同氏ノ哲学ヲ称シテ批評哲学トイフハ吾人今人今之ヲ見テ如何ナル旨趣アルモノト為スカ

第六 カント氏ガ著ス所ノ純理批評中ニ於テ問題トナス所ノ者ノ大要ヲ陳述セヨ／ 空間ナル者ハ吾人ノ直覚力ニ由テ知ル所ニシテ概念力ニ由テ知ル所ニ非サルコトヲ証明セヨ／ 右ノ事実ヲ解釈センニハ先ツ時間及ヒ空間ニ就テ如何ナル理論ヲ立ルヲ緊要トスルヤ

第七 カント氏ハ其所謂超越論法中ニ如何ナル意義ヲ包含セシメタルカ／ 吾人カカント氏ハ所謂類叙ナル者ヲ客観界ニ於テ用フルコトヲ得ルハ何等ノ権理アルヲ以テナリヤ／ 第八 カント派ノ哲学ノ全体ヲ考察スルニ当リ其中前後矛盾スル所アリト認ムルハ何等ノ点ニ在リヤ

おそらく円了もこれとほぼ同類の試験問題に取り組んだであろう。この試験問題は古代ギリシアから現代にまで及び、一項目につき二、三の問いがあつて、全体で一四項目あるから、解答にも相当な時間がかかるはずである。いまのような一時間以内に何も見ずに答えられるような安直な試験問題とは似つかない高度なものであり、哲学館講義録に見られるカントが「大方は簡単な紹介である」（武村前掲書）としても、明治前期のカント理解が低レベルだとは言えない。円了より二年後に入学した徳永満之も二年次にフェノロサから「哲学史」を学んでいるが、そこでは教科書としてシュヴェーグラーの哲学史概説の英文抄訳本が使われていた。一八八三年頃に記された円了の「稿録」にシュヴェーグラーの哲学史についての詳細なノートがあるが、残念ながら新プラトン派で終わっている。

ついでながら、「稿録」に見られるカント言及箇所を拾つておく。以下の日本文のうち、カタカナ文以外は円了によるものではなく、シュルツァ・柴田共訳である。したがって、つぎの引用文中にある「感想」も円了が抱いた感想ではない。

インマニユエル・カント（一七二四〜一八〇四年）

道德的に良い行為の基準は、定言命法の異なる形式で表現されているように、あらゆる理性的存在者のための法として普遍的に拡張された存在の可能性である。彼によれば道德の機能は理性である。何が道德的に正しいかについての理解はもっぱら理性のことからである。幸福に対するカントの立場は独特である。幸福は行為の目標ではない。行為の目標はむしろ、低劣な人間に対する理性的機能の自己主張である。(本年報 第一九号、横七五頁)

感想

デカルトは、主題に関してわずかに言及するだけである。スピノザの『エチカ』は主に思弁哲学の著作である。ライプニッツは、道德的諸問題を体系的に扱っていない。カントの時代以降の新しいドイツ哲学では事情が非常に異なる。カントもさほどではない。彼らのうち一人として、われわれのあいだに見られる倫理的思弁へののちの試みに影響を与えた者はいないし、カントを除いて、そうした試みを的確に扱える者はまだいない。(同右七六頁)

この二箇所は、シュルツァ氏の研究によれば(同右三八頁)、Alexander Bain, *Mind and Body: The Theories of their Relation*. New York 1875 からの抜粋であり、ノートも英文のままである。

カントの『道徳形而上学』

知性すなわち理論的部分と、道德すなわち実践的部分との明確な区別

デカルト、ロック、マールブランシュ、ライプニッツ、ヒューム

ロックの哲学は、イギリスの勝利であった。コンディヤックはフランスにおける同じ哲学。

イギリスでは、シャフツベリ、バトラー、ハチソンが、ロックの心理学に反対する基礎に立つ道徳哲学を



主張した。

其後 Hume 出テテ懷疑ヲ開キツトニ感覺ヲ用ル (sensational philosophy) スク餘リ一方ニ僻シ心理学ヲ立ツヘカラサルニ至リ「リード」氏人ノ普通ノ考ニ従ツテ哲学ヲトクニ至ル「カント」深思想ヲ以テ Hume ニ反シテ真覺教ヲ開ク

カント (思弁的) リード (常識)

経練家ニ反シテ起ルモノ其他

スチュアート、ハミルトン、クーザン

是皆「リード」及「カント」氏ノ説ヲ進展増補スルモノナリ「カント」ノ派「ファイフテス」「セーリング」

「ヘーゲル」ニ伝ハル

「カント」ハ自由意志ヲ以テ道義トス善意ノ天来ヲ論

彼は、「善意志は、それなしでは誰も幸福と思えないア・プリオリな条件を構成する」と述べる。

これは、Immanuel Kant, *The Metaphysic of Ethics*, trans. J.W.Semple, 3.ed. Edingburgh 1871 からの抜粋であるが、二行目以下はもちろんカントの言葉ではない。英訳書に付いている Henry Calderwood が書いた Introduction の IV. Kant's Place in the History of Philosophy からの抜粋である。ただし、「其後」以下のカタカ文は円了自身による記述である。最後の一文も Introduction の抜粋である。井上円了自身が書いたメモを見る限り、前述の福鎌忠恕氏が指摘していたように、カントをデカルトやロック、ライプニッツ、ヒュームらと関係づけて論じる哲学史の常識を越えて、スチュアート、ハミルトン、リード、クーザンといったイングラント、スコットランド学派と関連づけて理解しようとしていることがわかる。

このあとに、Edward Caird, *Critical Account of the Philosophy of Kant, with a Historical Introduction*, Glasgow 1877 の書名だけ記された箇所がある。

つぎに円了が一八八六年に書いた『哲学要領前編』を読もう(5)。ここで円了は、西洋哲学史の概略を述べながら、近代においてリードがデカルトの「内境の思想」とベーコンの「外境の実験」とを結合し「人心の真偽有無は到底証明し尽くすべからざるものと信じ、これを真に有するものと許して、その心に現するものみな実に存するものなりと定むるなり」という物心二元論を唱えたと述べたあと、リードと同様にヒュームの懐疑論に反対した人としてカントの名を挙げる。

氏はただに虚無論を排するのみならず、ロック氏の経練学、ライプニッツ氏の元子論の不当を論じてその中庸を取り、別に一種の原理を立つる者なり。その原理は人知の一半は経験よりきたり、一半は本来存すというものこれなり。今、氏の哲学の全組織を考うるに大に分かちて三部となす。第一は純理論、第二は実理論、第三は純理実理結合論なり。(『選集』第一卷一四二頁)

このように述べたあと、カントが哲学を三部に分けるのは、それが「知力、意思、情感」という心理に基づくからであり、その意味でカント哲学は心理哲学ないし主観論だと断ずる。そうは言ってもデカルトと異なり、カントは「客観の現象を空間と時間の二者より成るもの」とすると同時に「感覚上の経験をもちて原形を満たすところの材料」とする経験論を基礎としている。しかし、カントは「心の外に物質の実在を定め、その実体は全く知るべからざるものとなしたる」という「一大欠点」があるゆえに、つぎのフィヒテによって批判されることになる、等々。このように、西洋の哲学はギリシア以来、つねに「三断法の規則」に従って発展してきたとして、近世哲学史をつぎのように総括する。

そもそも近世哲学の始祖たるベーコン、デカルト両氏はすでに互いに相反したる原理を用うるをもつて、その後の学者あるいは一方を取り、あるいは他方を選び、あるいは二者の中間に立ちて両方を結合せんと欲して、哲学の進歩を呈するに至れり。ロック、ヒューム諸氏はベーコン氏を継ぎ、スピノザ、ライブニッツ諸氏はデカルト氏を受くるをもつてカント氏これを結合し、リード氏もまたこれを折衷して一段の進歩を与え、フィヒテ氏はひとり主観を取り、シェリング氏は主観に対して客観を立つるをもつて、ヘーゲル氏これを一統して完全の組織を開き、クーザン氏はドイツおよびスコットランド哲学を折衷し、スペンサー氏またドイツとイギリス従来の哲学を結合するものごとし。すなわち正断、反断、合断の三論相待ちて、今日の結果を見るに至る。(同右一四八頁)

井上円了によれば、近世哲学は古代ギリシア哲学や東洋哲学に比して優れている点がある。それは、「主観の空想を離れて客観の考証を用うる」ところにある。言い換えれば、主観と客観のいずれにも偏することなく、つねに「主観と客観の両全を期し、思想と実験の契合を主として、哲理をして一方に偏倚せざらしむる」という中庸、中点、中正の精神にある(同右一四九頁)。この中庸の精神の尊重は、円了が若い時から晩年に至るまで繰り返して強調してきたものである。一八八六年の『真理金針 続々編』、翌年の『仏教活論序論』にも、ほぼ同じ言説が見られる。

そもそも西洋哲学はいかなる諸論をもつて組成せるや。曰く、唯物、唯心、唯理なり。他語にてこれをいえば、主観、客観、理想の三論なり、あるいは経験、本然、統合の三論なり、あるいは空理、常識、折衷の三論なり、あるいは一元、二元、同体の三論なり、これを哲学の歴史に考うるに、初めにロック氏経験論を唱え、つぎにライブニッツ氏本然論を唱えたるをもつて、終わりにカント氏これを統合するに至り、ヒュー

ム等の学派は唯物に偏するの傾向あり、バークリー等の論は唯心に偏するの傾向あるをもつて、リード氏この二者を折衷して物心二元論を起すに至り、フィヒテ氏は主観をとり、シェリング氏は客観をとるをもつて、ヘーゲル氏理想論を唱えてまた二者を調和し、ゲルマン学派は空理に偏し、スコットランド学派は常識に偏するをもつて、この二者を統合したるものフランスのクーザン氏なり。スペンサー氏また可知境と不可知境の両端の一方に偏するの弊を恐れて両境を立つるなり。近世哲学の全系けだしこの諸説の外に出でず。しかしてその説おのおの論理の一端に走り、学者その中正を保持せんと欲して未だその目的を達することあたわざるなり。〔選集〕第三卷二五六、三六一頁)

一八九九年の『通俗講談言文一致哲学早わかり』でも哲学の三段分類が強調され、古代哲学は万有哲学時代、人間哲学時代、宗教哲学時代に分けられ、近世哲学は再興時代、新設時代、完備時代に分けられる。哲学が経験派と独断派に分かれ、「おのおの極端に偏する」に至つてカントが登場し、「従来の哲学の仮定独断を看破し、一大完全の組織を開きしより以後は、西洋の哲学大いに完備」した。したがつて、カント以後今日に至るまでを近世哲学の完備時代と名付けると言う。もつとも、「完備」と言つても、それはカント以前の不備と比較して言うにすぎず、哲学が真に完備したと言へるには「将来幾千万年の後を待たなければ」ならないと言う(同第二卷四八頁)。——幾千万年とはまたずいぶん遠い話ではある。しかし、そこまで待たずとも、「カント以後哲学界に百花爛漫の光景を呈し、この道に遊ぶものの眼には、向島や嵐山の花見に千倍万倍する興味」があると円了は述べている(同右五一頁)。かくして、西洋古代哲学はソクラテスを中興とし、近世哲学はカントを中興とするがゆえに、「余は先年、東西哲学界の四聖を選び、東洋にて釈迦、孔子を得、西洋にてソクラテス、カントを得、あわせてこれを四大聖人として祭ることに致しました」と円了は後年になつても述懐している(同右四九頁)。

ここでようやくわれわれは、四聖のひとりとしてのカントについて検討する段に至った。

### 三 聖人カント

一九一三年に公刊された円了の『哲学一瞥』にはこう書かれている。一九〇四年に哲学館が大学となることが文部省によって認可された記念にまず四聖堂を建て、釈迦、孔子、ソクラテス、カントの四聖を奉ったが、そのなかに「ヤソ」すなわちイエスを加えないのかと尋ねられることがよくある(6)。しかし、これは哲学堂であつて宗教堂ではない。イエスは大宗教家ではあつてもけつして哲学者ではない。イエスを哲学者として扱つた哲学史を自分はこれまで一度も見ることがない。釈迦は宗教家と言えるが、同時に哲学者としても古今東西高い評価を得ている。一九一六年の『哲窓茶話』でも「ヤソは宗教家なるも学者にあらず」という項目を立て、「『バイブル』は哲学としてはみるに足らない」と円了は評する(同右一二二頁)。

哲学の四聖という考えは、前述したように、井上円了が一八八五年に東京大学文学部哲学科を卒業してじきに公にされていることから見ても、とりわけ哲学という学問に対する円了の強い思いがここに籠められていると言える。円了が『真理金針』で「ヤソ退治」を表明したからと言って彼がキリスト教を端から否定しているわけではないことは、その本文を熟読すれば明らかである。高山樗牛や和辻哲郎らと違って、円了はあくまでも哲学者の四聖を選んだのである。しかも、円了はこれら四聖を「宗教的崇拜」の対象として崇め奉つたのではなく、あくまでも「教育的、倫理的、哲学的精神修養の意」においてこれを奉つたのである(同右六九頁)。

それ哲学は一種の別世界にして、その中に天地あり、日月あり、風雨あり、山海あり。釈迦の知はそのいわゆる日月なり。孔子の徳はそのいわゆる雨露なり。ソクラテスの識はそのいわゆる山岳なり。カントの学

はそのいわゆる海洋なり。その知はわれを照らし、その徳はわれを潤し、その識はわれを護し、その学はわれを擁し、わが父となり、わが母となり、君主となり、師友となり、日夜われを愛育撫養せり。ここをもつて不肖円了ら、幸いに哲学界の一人となるを得たり。(「四聖を祭る文」同右一一一頁)

これによると、円了にとつてカントは「学」を代表する「師友」であり、父や母や君主ではない。また、その学は「われを擁」するものである。だが、それにしても、近世哲学者はカント以外にも大勢いるし、前の哲学の欠点を批判的に捉えて乗り越えようとした哲学者もカントに限らない。近世哲学の総決算にして現代哲学の創始者と一時期広く言われたのはカントであるよりもヘーゲルであった。円了が強調する、一方に偏しない中庸の哲学ということであれば、(「あれもこれも」とキルケゴールに揶揄されたヘーゲルこそがぴったりのようにも思える。それにもかかわらず、なぜカントか。

しかも、『哲学要領前編』をよく読むと、そこにつぎのような一節がある。

デカルト氏は演繹に偏し、ベーコン氏は帰納に偏し、ロック氏は経験に偏し、ライプニッツは天賦に偏し、ヒューム氏は虚無に偏し、カント氏は主観に偏し、リード氏は常識に偏し、ヘーゲル氏は理想に偏し、コント氏は実験に偏し、ミル氏は感覚に偏し、スペンサー氏は進化に偏し、諸家おのおの一偏ありて未だ中正の論あるを見ず。(『選集』第一卷一四九頁)

ここでは、カントでさえ一方に偏した哲学者にすぎず、否定され乗り越えられるべき存在として位置づけられている。

カントの功績をフランス革命の指導者ロベスピエールに例えて、『純粹理性批判』こそドイツで超越神論の首を切った剣である」と述べたのは詩人のハイネだが(『ドイツ古典哲学の本質』第三卷)、円了はカントをナポレオ

ンになぞらえる（『哲窓茶話』所収「文武の功は一のみ」）。

かのナポレオンが有形の武略をもって欧州の大陸を一統したるも、カントがその無形の学問をもって、近世哲学を一統したるも、その功績は同じといわなければならぬ。故にナポレオンをもって一世の豪傑となさば、カントもまた一世の豪傑となさざるを得ないのである。西洋哲学は、カント以前にありては、あるいは唯物論を唱うるものがあるかと思えば、あるいは唯心論を唱うるものがあり、あるいはまた虚無論を唱うるものがあり、ほとんどその定まるころを知らなかつたのであるが、カントはひとたび出でて、四方の異説を排除し、これを統合分解して、その長短を斟酌折衷し、そして純然たる一個の批判哲学を大成したのである。これを例えてみれば、一個の果物があつて、人々これについてその一部分一部分を味わつておりしを、カントはたちまち鋭刀をもつてこれを割き、もつてその全体の真味を味わつたというようなわけであるから、これを近世哲学史上の一大功績といわざるを得ないのである。のちの哲学者が、純正なる哲学の光を得て、その真理の道を照らし得るものは、全くカントの恩恵といわねばならぬ。その事業は決してナポレオンにはないのである。（同右一〇八頁）

円了によれば、カントは旧来の数多の異説を統合分解し、長短斟酌折衷して新たな哲学を構築した。しかもその新たな哲学は、それ自身他の数多の異説のひとつに数えられるような相対的なものではけつしてなく、それらとは次元を異にする哲学としての「批判哲学」であり、哲学に新たな光を差し入れるものでなければならぬ。しかし、そのようにカント哲学を高く評価しうる根拠が具体的に示されているわけではない。なぜカントかとの問いはまだ残っている。

#### 四 カント主義者としての円了

##### (一) 哲学的精神

デカルトは演繹に偏し、ベーコンは帰納に偏し、ロックは経験に偏し、ライブニッツは天賦に偏し、ヒュームは虚無に偏し、カントは主観に偏し、リードは常識に偏し、ヘーゲルは理想に偏し、コントは実験に偏し、ミルは感覚に偏し、スペンサーは進化に偏している、等々と、円了は過去の哲学者の一面性を片端から批判するが、いったいなんらかの説に偏しない学者というのは存在するだろうか。かつてヘーゲルは哲学史講義の序論で、哲学史を「哲学的理性の英雄の画廊」に例えたが、その一方で、このようにつぎつぎと後進に否定され克服される光景を指して「阿呆の画廊」とも呼んだ。しかしながら、いまではこのような哲学史観そのものが否定されている。じつさいに偏しているのは、デカルトやベーコン等々ではなく、多様な内容を持つデカルトやベーコン等の哲学思想を「演繹」や「帰納」や「経験」「天賦」等々に振り分け押し込める評者（哲学史家）の側であることが明らかになったからである。過去の諸哲学を並べて「英雄の画廊」として見るのも「阿呆の画廊」として見るのも、それは見られる対象の問題ではなく、見る主観の問題である。したがって、われわれはいま、円了が過去の哲学者の一面性を指摘することで何を真に伝えようとしたかを見なければならぬ。

すべての哲学が一度カントに集まり、そこからさらにまた発展するというカントの哲学的的位置づけは、いまや陳腐な図式主義として顧みられないが、カントがイギリスの経験論と大陸の合理論とを統一したという説は、いまでも哲学史の教科書でしばしば見かける。加藤尚武氏によれば、こうした物語のルーツは、ある意味でカント哲学を黙殺した時代に挑戦しカント哲学を世に知らしめたラインホルトに求められるという。ラインホルトの「近代哲学史の構図」とは、加藤氏によると、「デカルトは近代哲学の創始者として、いわば『東の大関』とな



り、ベーコンが『西の大関』となるのだが、どちらもカントという東西を統一する横綱にはかなわない」という程度のしるものである（『二二世紀への知的戦略』筑摩書房、一九八七年、四八〜四九頁）。そうだとすると、経験論と合理論の統一図式はたしかに極めて教科書的ではあるが、円了がそうした図式主義を超えるものを見透していたかどうかが鍵になる。

『哲学要領』で円了は、西洋哲学の特徴を東洋思想と対比させ、こう述べる。

東洋は一国の思想ごとごとく一主義に雷同するの傾向あり。西洋はこれに反し一思想起れば必ず他の思想の起こるあり。一主義行わるれば必ず他の主義の行わるるありて、一学派の決して独立独行することなく、一主義の決して諸想を圧伏することなく、諸学諸説互いにその真偽を争い、その優劣を競うの勢いあり。これ西洋学の進化するゆえん、東洋学の退歩せるゆえんなり。（『選集』第一卷一〇七頁）

『哲学要領』や『哲学一夕話』などで強調されているように、円了が求めるものは徹底した中庸の精神、円満完了の精神であるが、その円満完了の中庸はたんなる折衷ではなく、あくまでも議論を尽くした上での総合の試みでなければならぬ。デカルトやベーコン等々が一つの立場に「偏している」とされるのは、それらを「偏している」と批判的に捉える次の哲学的議論が存在するからであって、何でもかんでも自己中心的に先行する哲学思想を否定しているわけではない。『哲学一夕話』では円山と了水という二人の弟子に自由に発言させたあとで、円了は彼らの説を評して、「なんじらの諍、おのおの一方の理をみて全局を知らず」とするが、その場合でも、「了水の論も一理あり、円山の説も一理あり、二者相合して始めて円了の全道を見るべし」（同右四四頁）として、両者の理を認めている。あくまでも先行する哲学を肯定的に評価し、そのうえでそこから生じる矛盾をどのように解決させるか。これこそカントが構築した批判哲学の精神であった。その意味で円了はカントからいわば「哲

学すること」を学んだのであった。

## (二) 感性・悟性・理性

人間の認識には二つの幹がある、とカントは述べ、それを感性と悟性だとしている。感性は外から対象を受けとる能力であり、悟性は、感性を通して受けとられたものを思考する能力であって、人間の認識にとって感性も悟性も欠かすことができない。カントによつて初めて、感性は認識にとつて不可欠なものとしてその位置を確保されたと言つて過言ではない<sup>(7)</sup>。だがもちろん、素朴経験論のように感性だけで認識が成り立つわけではない。「われわれの認識はすべて経験をもつて始まる。しかしそれだからと言つてわれわれの認識がすべて経験から生ずるのではない」とは、カントの『純粹理性批判』で最も有名な一節である。ここにカテゴリーという悟性の形式が働く余地があるのだが、それと同時にカントがここで言おうとしたことは、われわれ人間はどんな対象についてもそれそのものを認識することはできず、認識できるのはただ感性的直観の対象であるかぎりの対象、すなわち現象だけだということである。対象そのもの、現象の本体、これはかの悪名高き「物自体」であり、若き井上円了のカント批判もこの点に寄せられていたが、カントによれば、人間の認識の限界をわきまえずに、その能力を超えた世界に立ち入ろうとするならば、われわれは避けることのできない二律背反に陥つてしまう。人間の認識の二つの幹を無視して、とりわけ感性を蔑視し、悟性あるいは理性だけで認識しようとするときにそれは見られる。理性の越権行為を止めて、むしろ理性の根柢と範囲と限界とを画定することをカントは『純粹理性批判』の一つの大きな目的とした。

井上円了のいわゆる「妖怪退治」は、こうしたカントの批判哲学の精神に基づくものと言える。というのも、

明治から大正の時代の日本でまだ広範囲かつ強力に人心を捉えていた「妖怪」が、分別的悟性や理性的考察を欠き感性や直観にのみ頼ることから生じる迷妄の産物と捉えることができる反面、その悟性や理性からも妖怪が数多生まれることを円了は多くの事例を挙げて指摘している。円了が行った妖怪退治は、感性や直観を卑俗なものとして排除するのではなく、むしろ悟性や理性に助けられて感性や直観に磨きをかけるものでもなければならなかった。ここで円了の妖怪学を再論する余裕はないが<sup>(8)</sup>、円了は、妖怪のことごとくを排除したのではない。学術的に容易に説明できるような妖怪は、真の妖怪ではなく妖怪にすぎず、人はそんなものに振りまわされてはならないと繰り返し述べる。円了は妖怪や偽怪を排除することでむしろ「真怪」と称すべきものの存在を明らかにし、これを説明しようとしたのである。それは、カントが、混乱に陥るばかりであった形而上学を、徹底した批判哲学によってむしろ救おうとしたことに通じるものがある。カントが感性や経験の蔑視に反対すると同時に理性の越権行為を否定することで形而上学の再建を果たしたように、井上円了もなにか一方に偏する考えを徹底的に否定して議論を尽くしものごとを総合的に捉えることでわれわれ人間がほんらい求めるべきものは何かを明らかにしようとしたのであった。

### (三) 人倫のエートス

小林忠秀氏は『井上円了選集』第二巻の解説で、円了の『真理金針』は「キリスト教批判の書であるというよりは、仏教界の人士の自覚を促す啓蒙の書である」と捉え<sup>(9)</sup>、そこでの円了本来の主張が何であるかをこそ明らかにすべきだと述べている(四四九頁)。そして論点をつぎのように絞っている。

国家・社会が、そこに生きる人々に共通な人倫の態度(エートス)に媒介され、自分たちの共同体として

成立しなければ、真に強固で持続する制度とはなりえないということへの洞察（『選集』第二卷四五頁）

人々の安心立命の場となる国家である。言い換えれば、それは自分たちが、自分たちのために形成すべき国家であっただろう。円了にとって、そうした国家とは、宗教的エートスに媒介された共同体だったと考えられる。この宗教的エートスの媒介という一点において、「愛国」と「護法」——共同体の自立と宗教的信条の確立とは結びつく（同右四五七頁）

宗教的エートスに媒介された国家構想——これはまさにカントの国家論の本質である。ただし、急いで補足しなければならないが、ここで言われる「宗教」はけっして既成宗教を意味しない。カントにとって宗教は道徳的理性宗教だからである。同時に国家も、彼の『実践理性批判』で強調されているように、幸福主義ではなく自由実現のための理性主義に基づくものであり、言い換えれば、人びとの幸福を実現する福祉国家ではなく、自由を、池内紀氏によれば、「言語や伝統や生活習慣がちがっていたにもかかわらず、バルト海沿いの地で『民族共同体』といったものが実現していた」（10）。

なんでもかんでも井上円了とカントを結びつけようというわけではないが、小林忠秀氏が言う円了の「宗教的エートス」は、「人倫のエートス」であり、そこに生きる人びとの「内発的な自律のルール」であって、それを育成するものとして宗教的な営みがあると言うにすぎない。それは、仏教徒である円了が、哲学館でも東洋大学でも、さらに全国行脚の旅においても、仏教を学生にも一般の人びともけっして押しつけることがなかったことに現れている。そればかりか、キリスト教を批判する『真理金針』で円了はつぎのように述べるが、ここにわれわれは彼の真摯な学問的姿勢を見ることができであろう。

ヤソ教者は法に尽くすところの心をもってよく国に尽くし、国に尽くすの心をもってよく法に尽くす、尽くすところの心は一にして、対するところの義務は二なり。この心をもって国家に対すれば愛国となり、この心をもって教法に対すれば護法となる。よくこの護法愛国の両義を實際に尽くして、死してなお余栄あるもの、それただヤソ教者にあらんか。」〔選集〕第三卷一五七頁〕

護法と愛国——この両者の大切さを広く人びとに訴える際に欠かすことができないこと、それこそが、一方に偏しない哲学的精神すなわち批判哲学であり、井上円了が四聖の一人としてほかならぬカントを選んだ理由はまさにこの点にあったと考えられる。

### 【注】

(1) 「円了講話集」〔井上円了選集〕東洋大学、二〇〇四年、第二五卷、六六三頁〕より引用。井上円了は、明治三六(一九〇三)年五月七日から八日、カントが一生涯を過ごした港町ケーニヒスベルクを訪れた。井上円了『西航日録』(鶏声堂、一九〇四年。のち、『井上円了・世界遊行記』柏書房、二〇〇三年)につきのような日誌が見られる。

五月七日、早朝ベルリンを発し、午後七時、ドイツ北部の一大都会たるケーニヒスベルクに着し、ここに一泊す。当地は碩学カント先生の郷里なり。翌八日午前、まず大学前の公園に至り、カント先生の銅像に拝詣し、つぎに古物博物館をたずねて、先生の遺物を拝観す。その中には、先生在世中所携の帽子、杖、手袋、懐中鏡等あり。いずれも質素のものにて、田舎の老爺の携帯せるもののごとく見ゆ。大学内には八十歳前後の半身像ありと聞けども、校内を參觀する時間なかりき。午後、先生の墳墓に参拝す。墓所は市内なる大寺院(昨今建築中)の本堂に接続せる小室内にあり。その広さ、長さ三間、幅二間くらいなり。室外に板塀ありて、みだりに入ることを得ず。その傍らに中学校あり。これ、カント先生在世のとき教授せられし大学の跡に建設せるものなり。墳墓はこの中学の管理に属すといふ。余のここに至るや、校内より校長らしき一紳士の出ずるに会し、これに依頼したれば、氏はたちまち校僕を呼び

て墓所へ案内せしむ。室内の東方に墓標あり、西方に碑銘あり。この下に学界の一大偉人の永眠せるを思えば、肅然として、おのずから敬慕の情禁じ難きを覚ゆ。左に所感のままをつづる。

ブレゲルの水にうつれる月までも純理批判のかけかとぞ思ふ

不出郷関八十春、江湖遠処養天真、先生学徳共無比、我称泰西第一人。

ブレゲルはカント先生の墓畔に流るる川なり。

同日、午後七時ケーニヒスベルク発車、夜中十一時、独露国境に着す。

(2) 武村泰男「日本におけるカント」『叢書ドイツ観念論との対話』第六卷、ミネルヴァ書房、一九九四年、九九頁。

(3) こうした流れを批判する目的で大阪大学の澤瀉久敬氏は一九四八年に哲学哲学史講座を開設した際、「フランス哲学研究の充実および科学哲学の研究」を特色として打ち出した。拙稿「日本の哲学教育史(上)」(二〇〇一年、本年報第一〇号)参照。

(4) これは「井上円了学術総合研究」という共同研究の成果公開論集である。

(5) 井上円了著作からの引用はすべて「井上円了選集」(一九八七年)による。この選集では、表記がすべて現代的に改められている。また、底本は円了生存中の最終版とされている。

(6) 前掲の馬場喜敬氏によれば、高山樗牛や和辻哲郎、さらにはヤスパースも四聖を論じているが、彼らが挙げているのはともに孔子、釈迦、ソクラテス、イエスである。前掲一二六―一二七頁。

(7) 暉峻凌三氏は、カントが『論理学講義』で「理性的認識というものを形象という導きの系によってではなく抽象的に培うこと」をギリシア人が初めて行ったとして、「普通一般にいう認識」に停滞してはいけなさと述べていることに触れて、つぎのように解説しているが、同感である。「そういう具体的なものの考え方はカントによれば決して低俗な(Gemein)認識ではない。それは人間の日常大半の心のいとなみがそれであるような、まさに普通一般の(Gemein)認識なのである。カントは感性的表象のこの日常性を卑俗性としてではなく、まさしく日常性として確立し、そこに貫いている論理を明かにした。感性とは表象の日常的、心理的な存在様式である。感性の哲学的考察とはこの日常性、心理性の論理を探ぐることである。そしてまさにカントこそ哲学史上最初の公然たる感性学者(Vestheiker)だったのである。」(「感性」、出隆編『哲学の根本問題 上巻』實業之日本社、一九四八年、二三八頁)

(8) 拙著「井上円了の『哲学』観」(本年報第一八号、二〇〇九年)および「井上円了の妖怪学を通して唯物論を考える」(同第一九号、二〇一〇年)を参照されたい。

(9) 「こいねがわくは全国数方の僧侶この編を読み、大いに憤起するところあらんことを。こいねがわくは三千余万の同胞この編を見て、余が護法愛国の精神の存するところを知られんことを。」(井上円了『真理金針 続々編』緒言、『選集』第三卷、二六四頁)

(10) 池内紀訳、カント著『永遠平和のために』(総合社、二〇〇七年)解説一〇五頁。ケーニヒスベルクは「たしかにへんな国だった。町ごとに人種がちがっていた。風習も、好みも、食事もちがっていた。ある町はドイツ人が、べつの町はポーランド人がつくり、べつの村はロシア人が、さらにべつの村はリトアニア人がつくった。さらにカシユープ人の漁村やソルブ人の集落もあった。ゆるやかに住みわけをして、それぞれの風習や伝統に従って暮らしてきた。問題が起これば、それぞれが自治権を行使して解決したが、どの町にも少数者がいて、その多くがユダヤ人だった。そんな国がたしかに地上に存在した。」(池内、同右九八頁)